



## つれづれ時事寸評 4

### 「ベル友の時代」

大野 哲夫

先日、学生から「メールアドレスを変更したので、お手数ですが登録をお願いします。」というメールを受け取った。これまでも何回か似たようなメールを受け取ったことがあるのだが、そのたびに昔読んだ新聞(朝日新聞2007年8月26日)の記事を思い浮かべてしまう。新聞の記事によれば、中高生の携帯メールには独特の「作法」があるらしい。「メルアド(メールアドレス)を変えて、新しいアドレスを一斉送信するのって、友達を確認する意味があるんです。あて先不明で戻ってくるメールが何通かあるでしょ。それって、友達がわたしに教えず、メルアドを変えたってこと。つまり、相手の友達リストから削除された、ってことです。悲しい。でも、わたしも同じことしているんです。メールが面倒くさいのは、あまり仲良くない友達だとなかなかバイバイできないこと。1日に何回も『お風呂に入るから』ってウソついて、バイバイしたこともあります。」なるほど、中高生のケータイ術では、一斉メールで友達を確認する意味(儀式)があるらしい。しかも仲良しとは毎日メールするものの、一人ひとりとのやりとりではなく、いっぺんに一斉送信しているとのこと。一人ひとりに返事なくいいから楽なのだそうである。

私にメールしてきたのは大学生だが、同様なケータイの作法をこれまでに学んできたこ

とは容易に察し得る。メルアドの変更を知らせてきたことで、私を「友達」と思ってくれているのを喜ぶべきなのだろうが、先生への送信は変更の通知を儀礼的に送ったままで、友達としてのやり取りを期待したものではないことだろう。事実、私も確認(返事)のメールを出したりはしない。それにしても便利な時代になったものである。携帯やメールを使って相手とすぐにコミュニケーションが出来るのである。それも一人ではなく大勢の相手とたいていのやりとりが出来てしまう。しかもリアルタイムで、文字のみでやり取りが出来ることは画期的だ。

最近、学生に授業で古いビデオを見せる機会があった。選んだのは1996年11月3日(日)放送のNHKスペシャル「ベル友 12文字の青春」である。当時「ポケベル」はサラリーマンの仕事で緊急連絡用として使われており、それを若者たちが会話を楽しむツールとして利用し、急速に広がったメディアである。持ち込み禁止の学校や親の管理をくぐり抜け、見知らぬ相手ともメディア上でおしゃべりを楽しむことができる道具であった。しかし、12文字という短文しか当時は送れないため、短い単語に自分の思いを託したのである。自宅電話や公衆電話のプッシュホンから数字を文字に転換してメッセージを送信するため、親が電話を使えずトラブルとなったり、休み時間に学校の電話に生徒の列が出来たりと、何かと物議を醸していた。

ビデオでは、ベル友を求める高校生の話とポケベルを通してオンライン上の交際を続ける女性の話が織り込まれていた。高校生ナオキ(男)がポケベルを手に入れてから、それまでのおとなしい性格を脱し「ベル友200人」

を目指すのだが、ミキちゃんという特別なベル友に出会い、交際に発展していくというストーリーであった。ビデオを見た学生の反応は「すごく気持ち悪い！」とか、「よくあんな短い文でやりとりできるものだ」、「一生懸命公衆電話から文字を打ち込んでいる姿が、今から見るとこっけいだ」、「数字の組み合わせで文字に変換するのは面倒くさそう」、「あんなに毎日使ってあんなに依存している姿は不思議」、「知らない人とよく会話できるものだ、危なくないのか」、「現在の携帯電話では沢山の文字が送れ、機能も豊富で今からは考えられない」、「現代の技術がどれだけ進んでいるのかがわかった」といった感想が多く、「携帯が身体の一部になった今の私たちも10年後には同様にヘンな若者として見られるかも知れない」との反省はごく一部の学生から聞かれたのみであった。大半の学生は「ベル友の時代に生まれなくて良かった。今の便利な時代に生まれて良かった」とか、「12文字では何も伝えられない、ポケベルのやり取りは信じられない」というものであった。10年ひと昔とはいうものの、この10年の電話の変化は激変といってよいだろう。だが、古いビデオからは、送信できる文字に限界があり、数字を組み合わせで文字に転換するといったややこしい手続きが必要だった時代だからこそ、何とか自分の気持ちを相手に伝えたいと必死にコミュニケーションしようとする真剣な想いが伝わってくる。そこには若者がもつ深い「孤独」が反映している。

私にはあの時代の若者が共有していた「昭和の孤独」と、便利な携帯電話に依存している現在の若者の「平成の孤独」は大きく異なっているのではないかと考えている。「昭和の

孤独」は一言でいえば、求めているものがほとんど満たされないことで、孤立と孤独が強く自分に意識される「喪失としてのポケベル」だった。新しいメディアを使って親密な人間関係を求める若者の背後に孤独があったのに対して、「平成の孤独」は求められる相手の期待に十分応えることをしない自意識の孤独から、「道具としてのケータイ」へと変化したといえようか。明らかに生まれたときから便利で快適な情報機器を自分の身体感覚の延長として使いこなしている現代の若者にとって、孤独は自分の中にあるというより、関心を共有できないまわりの友人関係の中にあり、「安心としてのケータイ」が既存の人間関係を維持する重要な道具となっている。友人との「共有の場」をつねに維持していく努力は孤独が許されていない時代なのかもしれない。

(本学研究所研究員 社会心理学)

